八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査
——竹富島・西表島・小浜島の人々と自然とのかかわりの変遷——

松村　正治
（東京工業大学大学院）

はじめに

本調査の対象地は、沖縄県八重山諸島に位置する竹富島・西表島・小浜島の 3 離島である。ともに行政区としては沖縄県竹富町内にあるが、観光という側面からみると、それぞれ特徴が異なる。その特徴を簡潔に表現すると、島民の自主的な取り組みによる観光振興を実践してきたとされる竹富島、本土資本を導入して約 20 年前にリゾート開発が行なわれた小浜島、原生自然を観光資源として近年エコツーリズムが盛んになっている西表島、となるだろう。本調査では、2000 年度から 3 年間かけて、これら八重山の 3 離島における観光開発の比較対比を行ない、環境への影響緩和方策を検討することを目的としている。

この調査目的を素直に読めば、本調査研究は「環境」研究であるといえる。ある「環境」が措定されるということは、そこに「環境」を外縁に持つ中心があるはずで、それは通常「人間」である。ツーリズム研究の場合、この「人間」が「ホスト」か「ゲスト」かによって認識される「環境」が異なる可能性が大きい。環境認識をめぐって対立が生じるとき、そこに「環境問題」が現れる。このため、そうした問題を未然に抑制したり、あるいは発生した問題を解消するためには、対象となる「人間」がどのように「環境」を認識しているかを調べる必要がある。しかし、ただ現在の環境認識を調べればよいというわけではない。それは人間の知と関係しているので、歴史的に明らかにする作業が必要となる。

このようなことから、本調査では、「環境」を科学的に調査・分析することよりもむしろ、「人間によって「環境」がどのように認識されてきたかを聞き取りによって明証する。そして、「ホスト」「ゲスト」による環境認識をめぐる政治の場において、どのような調停がありうるのか、あるいはありえないのかを考究する。もちろん、そうした場においては、「ホスト」「ゲスト」という二分法も切れ味が鈍いだろう。なぜなら、そこではそうした集合的アイデンティティでは十分に掬うことのできない個人のアイデンティティが賭けられるはずだからである。だから、個別的かつ具体的な聞き取り調査が、なおのこと不可欠なのである。

この報告は、全体で 5 章から成る。Ⅰでは、既往文献、行政資料を基にして、調査対象地の概要をまとめ、Ⅱ～Ⅳでは、そうした資料および初年度の現地調査を踏まえ、調査対象となる 3 つの離島ごとに、主として戦後の環境史を、特に島民と自然とのかかわりの変遷を辿りながら整理した[1]。Ⅴでは、この調査の主眼である観光に焦点を当て、現時点で明らかになってきた各離島におけるツーリズムの問題点をとりまとめた。

Ⅰ．調査対象地の概要

1．気象

八重山諸島は、地理的には北回帰線のすぐ北に位置し、近海を黒潮が流れている（図 1）。年平均気温は、石垣島 23.8℃、西表島 23.3℃である（表 1, 2）。海洋に囲まれているため、年間を通して気温の日較差は小さく、また湿度は年平均約 80%と高いことから、亜熱帯海洋性気候と呼ばれている。四季の変化は不明瞭だが、夏と冬の季節の相違は大きい。夏期は太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多く、真夏日と熱帯夜が続く。これに対して、冬期はシベリア高気圧が発達して、周期的に北東の季節風が吹き、小雨まじりの曇天で肌寒い日が多い。

年平均降水量は、石垣島 2,065.8mm、西表島 2,342.5mm と 2,000mm を越える。しかし降水量

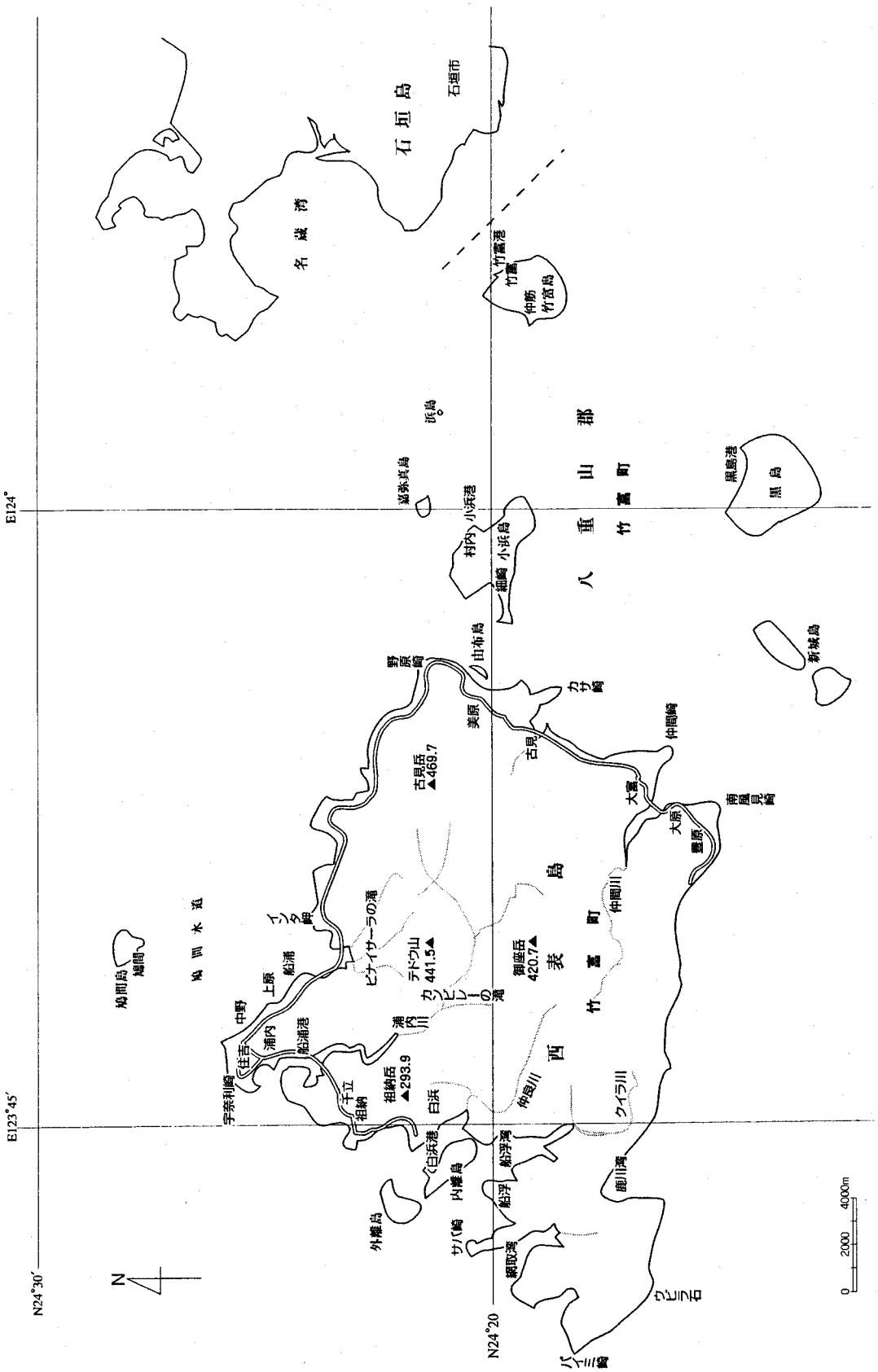
石垣島
石垣市
名蔵湾
竹富港
竹富
仲筋
竹富島
浜島
西表島
八重山郡
竹富町
黒島港
黒島
新城島
小浜港
小浜島
村内
細崎
由布島
カヤ崎
仲間崎
南風見崎
大富
大原
豊原
仲間川
古見
美原
野原崎
古見岳
▲469.7
ピナイサーラの滝
テドウ山
441.5▲
カンピレーの滝
御座岳
420.7▲
仲良川
クイラ川
鹿川湾
ウビラ石
バイミ崎
網取湾
船浮湾
船浮
内離島
外離島
サバ崎
白浜港
白浜
祖納岳
▲293.9
祖納
千立
船浦港
船浦
上原
中野
浦内
浦内川
住吉
宇奈利崎
イタ崎
鳩間島
鳩間
鳩間水道
E124°
E123°45′
N24°30′
N24°20
N
0
2000
4000m

図1　調査対象地の位置

表1　石垣島の平均気温・降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
平均気温（℃）	17.7	18.3	20.2	23.0	25.7	27.7	29.2	28.8	27.7	25.3	22.5	19.4	23.8
降水量（mm）	119.8	112.9	125.5	152.0	230.6	202.2	181.2	235.9	229.0	173.7	169.4	133.4	2,065.8

石垣市(1999)をもとに作成(資料:石垣島地方気象台、統計期間:1961～1990年)

表2　西表島の平均気温・降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
平均気温（℃）	17.6	18.1	19.8	22.6	25.5	27.2	28.4	28.0	27.0	24.9	22.1	19.1	23.3
降水量（mm）	172.3	161.4	153.2	163.6	210.6	196.1	193.2	244.4	248.1	222.8	224.1	152.9	2,342.5

竹富町(1999)(資料:西表島測候所、統計期間:1961～1990年)

は、梅雨と台風に依存するため、年によっては夏に干ばつになることがある。一方、大型の台風が接近するときは、甚大な被害に見舞われる。

2．人口

1）人口動態

調査対象である3離島は、終戦直後、引揚者が集まったために人口が激増した。たとえば竹富島では、戦前は人口が900～1,000人だったのが、2,300人程度に膨れ上がったと言われている。しかし、一時滞留者たちは、島の荒れ地を開墾して生活を送り、しばらくして、石垣島や沖縄本島、あるいは本土へと移っていった。

表3は、対象3島と石垣島における戦後の人口推移を示している。これによると、同じ八重山にあっても、石垣島と他の3離島との間には顕著な違いをみることができる。

石垣島は、1955年から1965年にかけて人口が8,000人程度増加し、その後10年間は減少して1955年のレベルに戻ったが、再び1985年にかけて増加に転じて1965年のレベルを回復し、その後10年間はほぼ横ばいとなっている。一方、対象3島の人口は、1955年から減少の一途を辿っていたものの、小浜島は1975年から、西表島は1985年から増加傾向にある（図2）。

また、最近の「竹富町地区別人口動態表」（平成12年7月現在）によると、竹富島の人口は280人であり、増加の兆しが認められるほか、西表島の人口は2,008人で、近年急速に人口が増えていることがうかがえる。これに対して小浜島の人口は460人で、1990年から人口が減少している。

2）年齢構成

次に、年齢3区分（0～14歳、15～65歳、65歳以上）によって島ごとに人口の内訳を示したのが表4である。これによると、西表島が竹富島・小浜島とは大きく異なる年齢構成であることがわかる。つまり、3島を比較すると、西表島は若年・青壮年が多いのに対し、竹富島・小浜島は老年が多い。特に、竹富島は65歳以上の割合が3人に1人(33.6%)と極めて高い。これは、西表島の割合17.6%のほぼ2倍に相当する水準である。西表島が相対的に「若い島」であるのは、近年、特に観光の著しい西部において、若年の流入が多いことによるとみられる。

3．産業（特に農業）

1）産業別就業者数

表5は、対象3島の産業別就業者数とその割合を示したものである。

表3　島別の人口推移

年	竹富島	西表島	小浜島	石垣島
1955	1,054	4,027	1,054	33,131
1960	789	3,496	934	38,481
1965	480	3,287	825	41,315
1970	336	2,302	560	36,554
1975	352	1,515	410	34,657
1980	356	1,533	456	38,819
1985	308	1,641	488	41,177
1990	273	1,711	503	41,245
1995	262	1,887	486	41,777

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成
(資料:国勢調査、単位:人)

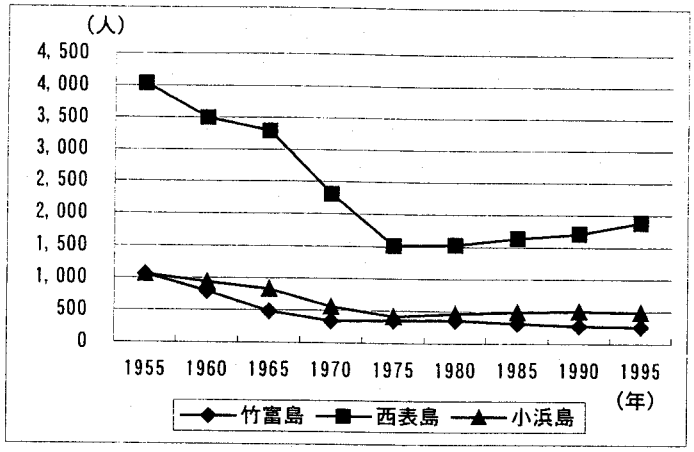

図２　対象３島の人口動態

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:国勢調査、単位:人)

表４　対象３島の年齢構成

	総数	年齢別人口（人）			年齢別人口割合（%）		
		0-14歳	15-64歳	65歳-	0-14歳	15-64歳	65歳-
竹富島	262	40	134	88	15.3	51.1	33.6
西表島	1,918	446	1,135	337	23.3	59.2	17.6
小浜島	486	89	260	137	18.3	53.5	28.2

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:国勢調査 1995 年)

表５　対象３島の産業別就業者数

	竹富島	西表島	小浜島
総数	133	1,040	258
第一次産業	15	257	68
農業	*3*	*218*	*55*
林業・狩猟業	*0*	*2*	*0*
漁業・水産養殖業	*12*	*37*	*13*
第二次産業	15	163	22
鉱業	*0*	*0*	*0*
建設業	*5*	*118*	*7*
製造業	*10*	*45*	*15*
第三次産業	103	620	168
電気・ガス・水道業	*0*	*2*	*0*
運輸通信業	*36*	*83*	*11*
卸売・小売業	*24*	*156*	*12*
金融保険・不動産業	*0*	*0*	*0*
サービス業	*42*	*362*	*142*
公務	*1*	*17*	*3*

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:国勢調査 1995 年、単位:人)

この表から、竹富島が西表島・小浜島と異なる産業別人口構成となっていることがわかる。他の2島と比べて、竹富島では、第一次産業、とりわけ農業就業者の割合が2.3%と非常に低い。竹富島が農業から観光の島へと、産業の重心を移動させてきた結果がここに表れている。一方、小浜島は、大型リゾート施設を誘致したものの、島全域が観光化されているわけではなく、サトウキビ栽培と畜産が中心となっており、農業就業者の割合は 21.3%と高い。西表島も、西部では観光化は進んでいるが、東部は小浜島と同様にサトウキビと畜産が中心で、農業就業者率は21.0%と高い割合を示している。

また、表の内訳をみると、西表島における建設業就業者の割合が高いことが注目される。

2）農家数の推移

次に、農家数が1980年からどのように変化してきたのかを島ごとにみる（図3～図5）。この図から、竹富島で1985～90年にかけて、農家数が激減したことがわかる。これは、高齢化と観光化に伴うものとみられる。一方、西表島と小浜島の農家数は1985年がピークで、以降は減少傾向が続いている。

また、専業、第一種兼業、第二種兼業の割合をみると、小浜島において、専業農家の割合が48.6%（1995年）と高いことが特徴的である。西表島でも、専業農家の割合は31.0%と比較的高い。

3）年齢階級別農家人口

表6は、年齢階級別に農家人口を示したものである。西表島では、30～59歳の農家人口が男女合わせて209人（全体の43.4%）を占め、青壮年人口が多い。これに対して小浜島では、65歳以上の農家人口が85人で47.2%を占め、高齢化と後継者不足の問題が深刻であることを読みとれる。

4）経営耕地面積

表7は経営耕地面積を示したものである。まず、竹富島において田が無いことが注目される。これは、農家戸数が少ないことよりも、島が隆起サンゴ礁からなる「低い島」[2]であるため、水田ができないという地質に原因が求められる。

八重山の多くの島では、2種類に島を呼び分ける習慣がある。一つは、田国（タングン）島と呼ばれ、山があって、そこから流れ出る水を利用して田を開くことのできる比較的大きな島である。西表島・石垣島・与那国島・小浜島がこれに相当する。もう一つは、野国（ヌングン）島と言い、山も川もない平らな島で、水田はまったくみられないか、あっても波照間島のようにわずかに天水田がある島である。竹富島・黒島・新城島・鳩間島・波照間

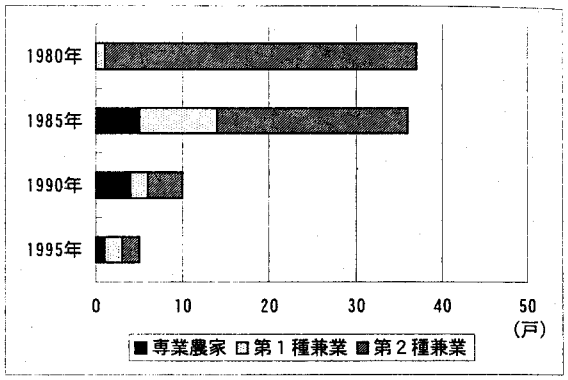

図3　竹富島における農家数の推移

竹富町資料をもとに作成（資料：農業センサス、図4と図5も同様）

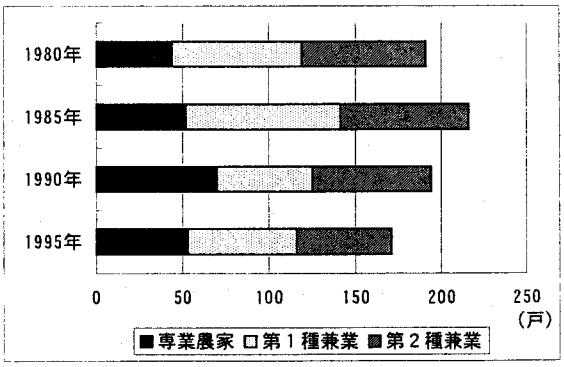

図4　西表島における農家数の推移

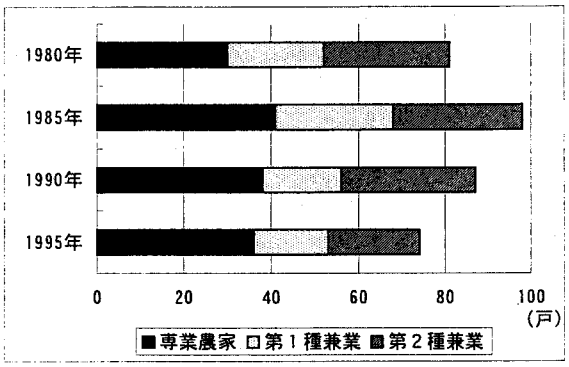

図5　小浜島における農家数の推移

表６　対象３島における年齢階級別農家人口

	竹富島		西表島		小浜島	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
0-14歳	7	8	42	37	11	4
15-29歳	1	3	3	5	3	6
30-59歳	0	0	120	89	21	22
60-64歳	3	3	27	27	14	14
65歳-	1	1	63	69	42	43
計	2	1	255	227	91	89
	15		482		180	

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:1995 農業センサス、単位:人)

表７　対象３島の経営耕地面積

	経営耕地面積（a）				農家戸数	農家1戸当り
	総面積	田	畑	樹園地	(戸)	耕地面積（a）
竹富島	1,045	0	755	290	5	209.0
西表島	55,461	5,040	39,614	10,807	171	324.3
小浜島	14,857	1,032	13,815	10	74	200.8

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:1995 農業センサス)

表８　対象３島の牧場数・面積

	牧場数			牧場面積（ha）			1経営体当たり
	総数	個人営	団体営	総面積	放牧地	採草地	牧場面積（ha）
竹富島	7	6	1	91.7	88.4	3.3	13.1
西表島	50	48	2	445.6	290.3	155.3	8.9
小浜島	44	44	0	132.7	98.7	34.0	3.0

沖縄県企画開発部(2000)をもとに作成(資料:市町村報告、平成９年12月末現在)

島がこれに含まれる（安渓, 1988）。このため、竹富島は、農家戸数が多かったときであっても、水田は無かったようだ。

次に目立つのは、西表島における農家１戸当たり耕地面積が324.3ａであり、竹富島・小浜島の約200ａよりも５割以上広いことである。これは、後者の農業が自給自足を原則とする伝統的な形態を基盤としているのに対して、西表島では、最初から開拓民が大規模農業を目指していたことによると考えられる。

５）牧場数・面積

表８には牧場数・面積を示した。ここでは、竹富島では１経営体当たり牧場面積が13.1haと広いのに対して、小浜島は牧場数が44と西表島の50とほとんど変わらないのに１経営体当たり牧場面積が3.0haと狭いことがわかる。ただし、竹富島の場合は、牧場数が７と少ない。

４．観光

竹富町では、従来、観光客数を船舶利用者の40％として推計していた。しかし、過去の調査では乗船客の70％以上が観光客であったというデータもあり、正確な入域観光客数の把握が必要となっている[3)]。遅ればせながら、2000年の８月と11月に観光客実態調査を行なったが、まだ結果が公表されていないため、現時点では観光客の正確な実態を知る資料はない。したがって、以下に示す図のもとになっているデータは、信頼性が高くないことに留意されたい。

図６は、観光客入域者推定数の経年変化（1989～99年）を示したものであり、図７は、1999年の観光客推定数を月別に示したものである。西表島については、東部の大原港と西部の船浦港の利用

者から入域者が推計されているので、図にも両者を分けて表示した。西表島においては、東部と西部をつなぐ北岸道路の建設が1975年と比較的新しく、それ以前は同じ島にあっても両地区は別の島のようだったと言われる。このため、現在でも東部と西部には多くの点で相違がみられ、観光客の入り方も大きく異なる。

図6・図7をもとにすると、地域を2つのタイプに分けることができる。すなわち、竹富島と西表島東部は90年代を通して観光客数が右肩上がりであり、かつ冬場に大きなピークを迎えるのに対し、西表島西部と小浜島は90年代を通して観光客数が横ばいに近く、また冬場のピークも顕著ではない。このように分かれるのは、近年のパックツアーの流行が影響していると考えられる。なぜなら、そうしたツアーでは、一日にいくつかの島を巡る周遊ツアーが人気であり、竹富島と西表島東部は港から短時間で重要な観光スポットを廻ることができ、ツアーのコースに組み入れられやすいからである。また、夏期より冬期にこうしたツアーが盛んであることも、この考察を支持する。

周遊ツアーがどのようなコースをたどるのか、その例を2つ挙げよう。まず、典型例として、(有)安栄観光主催の「西表島・由布島・小浜島・竹富島 豪華4島めぐり」(所要時間約8時間30分)がある[4]。

石垣港（8:50）～西表島・大原港（9:35）—仲間川（ボート遊覧・上流サキシマスオウノキ見学）—仲間川ボート乗り場—美原（水牛車にて）—由布島（昼食）—（水牛車にて）—美原—西表島・大原港～竹富島港—マイクロバス観光—水牛観光—竹富港（16:45又は17:15）～石垣港（17:00又は17:30）

一日に4島を巡るコースもある。たとえば、(有)安栄観光主催の「豪華 4 島めぐり　西表島・由布島・小浜島・竹富島」（所要時間約8時間30分）は、次のとおりである。なお、石垣港を9:30に出て、小浜島を寄らずに3島を巡るコースには「の～んびり3島周遊コース」（所要時間約8時間）と名付けられている。

石垣港（8:30）～大原港着→送迎バスにてボート発着場→仲間川ボート遊覧→サキシマスオウの木見学バスにて由布島へ→干潟を水牛車にて由布島植物園→バス→大原港（12:20）～小浜港着→バス→はいむるぶし（昼食）フリータイム→島内観光→小浜港発（14:40）→竹富港着→マ

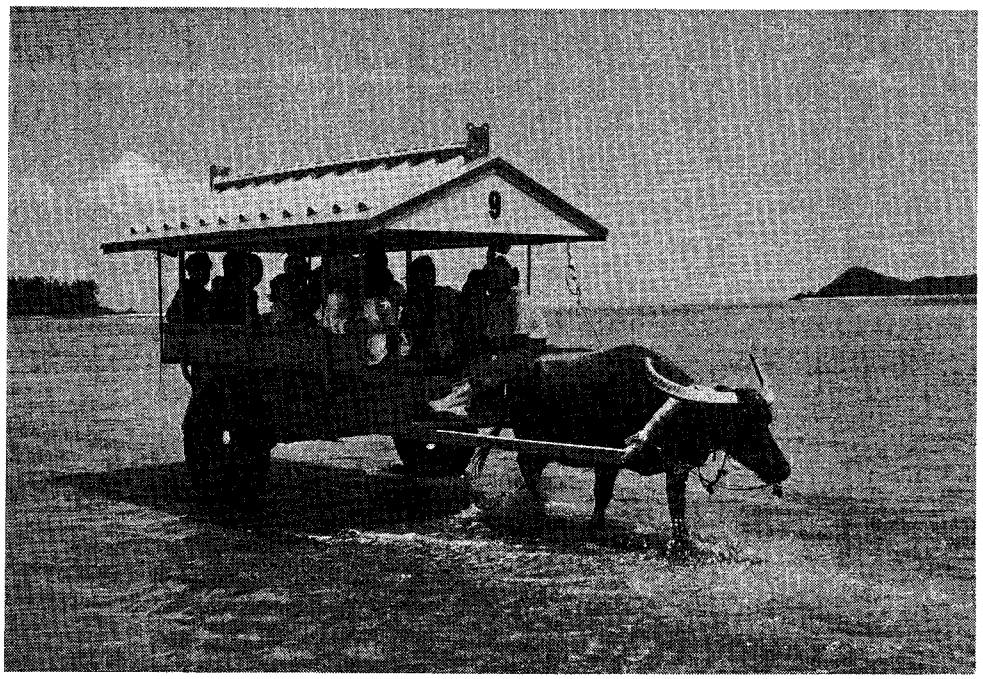

写真1　由布島の水牛車観光

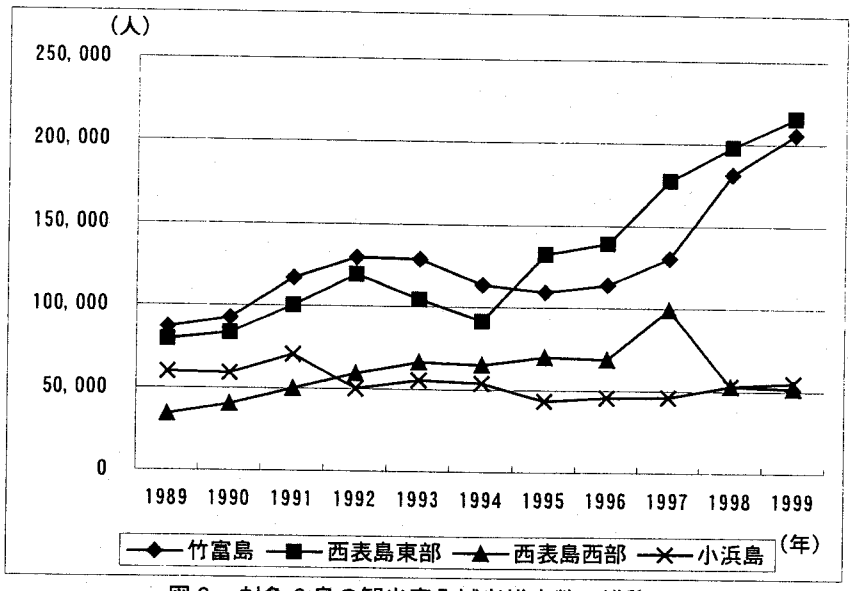

図６　対象３島の観光客入域者推定数の推移

竹富町資料「竹富町観光入域者数【島別】」より作成

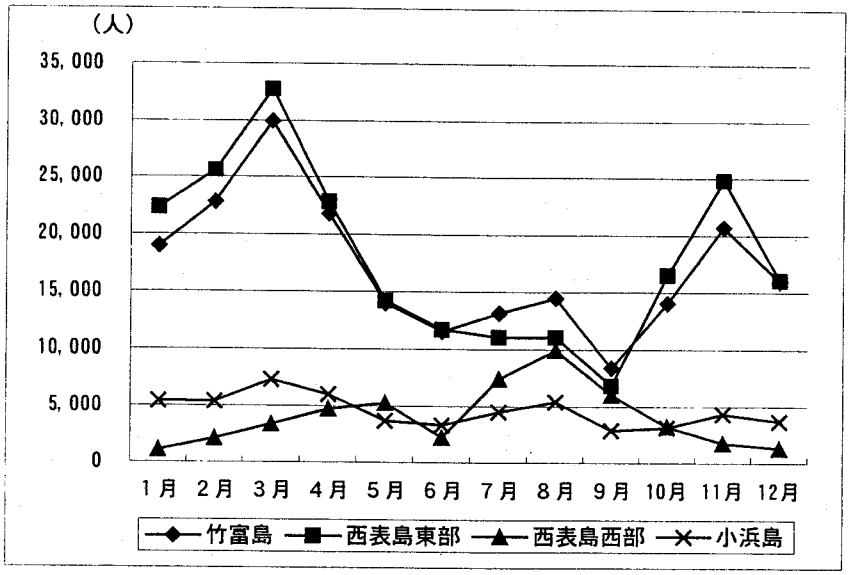

図７　対象３島における月別観光客入域者推定数

竹富町資料「平成 11 年 竹富町観光入域者数」より作成

イクロバスにて島内観光→グラスボート→竹富港発～石垣港着（17:00）

冬期のパックツアーでは、西表島西部を行くコースは少ない。それは、北西の季節風が強いため、西部の玄関口である船浦港と石垣港をつなぐ航路が週に 1 日程度しか運行できないからである。このため、図 7 にみるとおり、西表島西部に入る観光客数は夏期の 8 月にピークを迎え、冬期のピークはない。その点、小浜島は大型リゾート施設「はいむるぶし」があり、パックツアー客を受け入れているので、冬期にピークがある。

Ⅱ．竹富島

1．竹富島の概要

竹富島は、方言ではテードゥンまたはタキドゥンと呼ばれ、周囲 9.2km、面積 5.42km^2 、世帯数 141 戸、人口 280 人（2000 年 7 月現在）の島である。赤瓦の民家とサンゴ石灰岩を積み上げた石垣、そして白砂を敷き詰めた道路など、沖縄の伝統的な町並みが保全されており、八重山観光の中心地となっている。竹富島を特徴づけるこうした町並みは、昭和 62 年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」として指定された。また、島の最大行事で、国の重要無形民俗文化財に指定されている種子取祭や、国の伝統的工芸品の指定を受けているミンサー織りなど伝統文化が今も息づいている。

地形・地質に目を転じると、島のほとんどが隆起サンゴ礁からできており、平坦で川もなく、最も高いところでも 21m に過ぎない。植生は、海岸にオオハマボウ、モンパノキ、クサトベラ、ハマユウ、ハテルマギリ、グンバイヒルガオ、アダン、トウツルモドキの生育をみる。鳥類として、ヒヨドリ、スズメ、ウグイス、メジロ、キジバト、アオバト、セッカ、リュウキュウコノハズク、アオバズク、セキレイ類、カモ類、アマサギ、クロサギ等が生息し、ほかに爬虫類、魚類も多い（大山, 1995）。

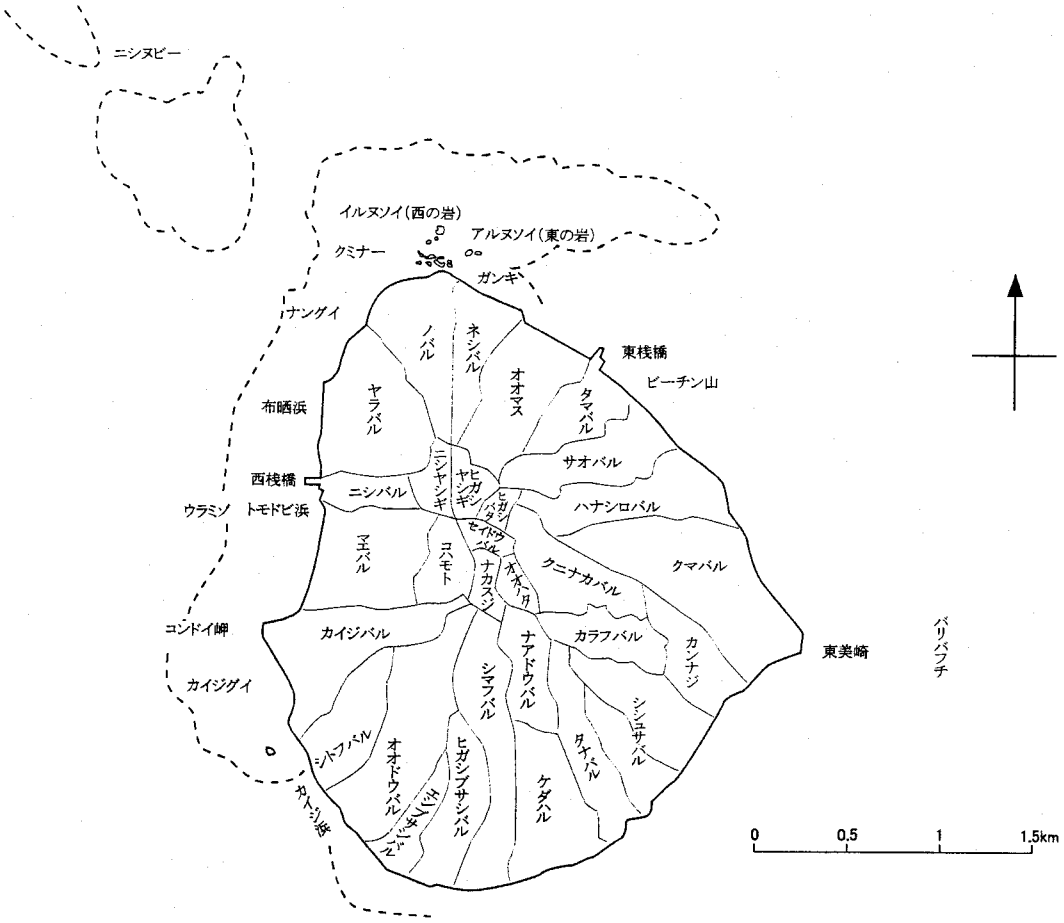

図８　竹富島の地名
大山(1995:132)

2．農業

1）戦後の畑作

戦前、竹富島の人口は1,000人弱だったが、終戦直後には約2,300人まで膨れ上がった。このため、深刻な食糧難に陥り、救荒食としてソテツ（方名：シヒーチ）を食べることもあった。ソテツは有毒成分サイカシンを含むため毒を抜く手間が必要だが、実や幹から得られる澱粉は貴重な食べ物であった。現在、島内にみられるソテツは自生しているが、元来は琉球王府時代に凶作に備えて植栽を奨励され、管理されていたものである（宮城, 1972: 167-168）。

ソテツというと「ソテツ地獄」という言葉をすぐに想起するかもしれない。主食としての米麦・雑穀はもちろんサツマイモまでも手に入らないので、やむなくソテツを食べるような沖縄の庶民生活の苦しさを、ときに中毒死者を出すこともあったという点を象徴的にとらえて語るときに使用される言葉である（来間, 1979: 21）。聞き取りでも、死に至ったという話は聞かれなかったが、中毒症状を起こした人が身近にいたという例はいくつかあった。

終戦後、食料不足を克服するために、島内の可耕地はすべて開墾された。水に乏しい島なので田はできないが、畑にサツマイモ（方名：ンまたはアッコン）や雑穀、野菜などを植えていった。防砂林・防潮林（モクマオウやアダンなど）と島に28ヶ所ある御嶽を除いて、休耕地は一切無かったという。

戦後の混乱が落ち着きをみせるようになると、換金作物としてサトウキビ栽培が盛んになった。もともと竹富島では、古くから屋敷の角に祭事用のサトウキビが植えられおり、製糖用の栽培も1885年以降から始められ、戦前は盛んだったようである。戦後も1960年代に入るまでは、かなり盛んにサトウキビが作付けされ、1954年には、それまでの牛車製糖場（シートーヤー）に替わって機械動力工場が2軒建設された。

ところが、1959年に琉球政府が糖業振興法を制定したことにより、島のサトウキビ栽培は大きな影響を受けた。政府が糖業の振興を図り、合理化を促進するなかで、竹富島の2工場は石垣島の製糖会社に買収されたのである。それでも、1962～67年までは、竹富島で栽培されたサトウキビが石垣島まで船で運ばれていた（入嵩西, 1993: 246-249）。この頃の話であるが、一度に大量のサトウキビを船で運ぼうとしたところ、重すぎて船内に水が入って沈みそうになり、あわてて積んだサトウキビを海中に放り出し、命からがら港に戻ったこともあったと聞く。現在は、サトウキビ畑を島内にみることはできない。

UYさん（1925年生まれ、男性）によれば、竹富島には良質のサトウキビをつくることのできる土壌があるという。かつて栽培をしていたときは、平均して糖度が22～23度と極めて高く、最高で24度に達したときもあったそうだ。

土壌の話が出てきたので、ここで竹富島における土壌の民俗認識に触れておく。OHさん（1907年生まれ、男性）によると、土壌は5つに分類される。すなわち、石のないンガド、石はあるが耕作可能で、イモや大豆を植えるのに適当なブックシェラ、石ばかりでほとんど土がなく、石と石の隙間に草が生えるようなガジェーラ、海岸近くで小石が多いマシラ、海岸近くで砂土のカニブである[5]。サトウキビは、ンガドやブックシェラと呼ばれる土壌で育てられたのであろう。

2）西表島への通耕

竹富島の農業は、西表島への遠距離通耕[6]を抜きにしては語れない。周辺離島からの遠距離通耕については、すでに浮田（1974）によって報告されている。これによると、人頭税の時代は、島内のほぼ全戸が西表島まで水田耕作に通い、戦前までは少なくとも30戸が通耕していた。由布島の対岸と高那の近くとに竹富島の人々がつくっていた水田があり、マラリア無病地の由布島に田子屋を設け、そこに寝泊まりして、対岸の西表島へ耕作に通った。しかし、戦後は次第に竹富島からの通耕は減少し、ついに1973年には皆無となった。

この通耕には、戦前ならば大きな松をくり抜いた丸木舟が用いられた。OHさんは、実際に松をくり抜いて4艘の船をつくったことがあるという。竹富島から西表島までは全行程約9kmあるが、サンゴ礁づたいに棹でさして行ける区間が長いので、風の無いときは基本的に棹を使って移動し、水深の深い1km程度の区間だけ櫓を漕いで渡ったようだ。

戦前の由布島は、竹富島の人にとって一時的に寝泊まりする場所であったが、戦争末期に女性や子どもたちが疎開したことから定着する者が現れ、

敗戦後に由布という集落が正式に発足した。最も多い時期には22～23戸が集まったが、1969年に大型台風の来襲で高波被害に遭ったことが契機となり、1971年8月、対岸に移転して新集落・美原を建設した。

OHさんによれば、由布島はもともと古見の人に所有されていたのだが、1931～32年の株価暴落があったときに手放され、竹富島の人が競り落としたものであるらしい。以来、由布島は竹富島の飛び地のようになっており、現在は竹富公民館が所有して、島で植物園を経営している人に貸している。

ところで、竹富島の人たちの西表島との関係は、水田耕作だけにとどまらない。建築用材を求めて西表島に渡ることもあった。この慣習は「山番」と呼ばれ、労働力の相互提供であるユイによって行なわれた。たとえば、終戦直後に中筋集落の集会所を建てるための山番では、7人程度で約1週間かけて200本近い材木を伐採したという(西山, 2000b)。西表島から伐り出された木材は、いったん西桟橋で海水に浸けられた。これは、防虫効果を持たせるためだったので、木が浮かないように岩を載せた。建材として最高のイヌマキ(方名:キャーンギ)は、この塩漬けが不要だったが、ゾンキと呼ばれる木は塩漬けしなければならなかった。

また、島内で製糖業が盛んだった頃は、できた黒糖を詰める樽の原料として木材が必要だった。これも、タビやアサグルと呼ばれる木を西表島から伐出したという。サトウキビを煮るときの燃料は、ギンネムやバカス(サトウキビの絞りかす)が利用されたので、島内で自給できたようだ。ちなみに、現在、島中に繁茂しているギンネムは、昔の村長が薪や牛の飼料にするため台湾から導入されたものだと伝えられている。

3. 養殖業——クルマエビ養殖

島の南部に、日本最南端のクルマエビ養殖場がある。1984年12月に設立された竹富エビ養殖(株)の養殖場である。現在、エビの養殖業は、観光業以外で、島最大の産業となっている。

今でこそ、竹富島の人口は増加の兆しをみせているが、会社設立の頃は減少する一方で、高齢化が進行していた。島の将来を心配した現社長UTさん(1949年生まれ、男性)が、こうした過疎化傾向を食い止めようと思案して始めたのがエビの養殖だった[7]。

竹富島で養殖を行なうことは、輸送コストが高くなるという不利な面がある。しかし一方で、海水温度が冬でも下がらないため、冬期の給餌が可能で養殖期間が短くて済むという利点もある。温かいので脱皮の周期が早く、エビの身が柔らかくなるという長所もあるそうだ。

島出身者の雇用機会を島内で創出するために地場産業を起こしたのであるが、正社員のなかに島出身者は少ない。社長以下役員も含めて正社員13名のうち、島出身者は4名である。活クルマエビの出荷時期は、10～翌5月であるが、この間は朝4時に出勤しなければならない。島出身者が少ないのは、そうした勤務体系が影響しているかもしれないと会社の人は話す。

すでに、会社設立から15年以上が経過し、経営状態は安定してきた。今では、日本全国17の中央市場に出荷している。けれども、観光客は竹富島で活クルマエビを食べることは少ない[8]。島の特産品ではあるが高級品でもあるので、都市部での消費が中心となっており、竹富島をパックツアーで周遊する人たちが目にすることはほとんどない。会社としては、観光客がゆっくりと島で過ごし、そのなかで活エビの躍り食いを楽しんでもらうようなサービスを提供できればと考えている。

ところで、この会社は、採用条件の一つに島の行事への積極的な参加を挙げている。これは、島に住む者にとって当然な社会的責任であるとはいえ、それを職安に提出する文書にも採用条件として記載しているところは珍しいだろう。

島の行事への参加のうち、最も大変なのが種子取祭への参加である。奉納芸能の会場となる世持御嶽で、天幕を張る役割を担っている。また、奉納芸能のある2日間は、裏方であらゆる雑用をこなす座侍(ザータイ)を努める。常に待機して、指示があれば必要なものを取りに行ったり、弁当や飲み物を配るのが仕事だ。

UTさんは、祭事の芸能で舞台余興になかなか出られず、裏方を務める本土出身の社員たちに同情的である。しかし、社員がそうした仕事をやらなければ、島の祭りを維持していくことは困難な状況にある。だから、採用条件に、島の行事への積極

的な参加をあらかじめ含めておく必要があるのだ。

4．マイナーサブシステンス

1）海藻採り・貝採り

竹富島には川や田がないので、川漁漁や水田漁労などはみられない。このため、女性のマイナーサブシステンスは、もっぱら海藻採り・貝採りとなる。

島周辺で採れる主な海藻は、アーサ（ヒトエグサ）とスヌル（モズク）である。UM さん（1925 年生まれ、女性）によると、12 月末～4 月初頭がアーサ（ヒトエグサ）の採れる時季である。その中でも、1～2 月頃は身が薄くて細く、味がよいとされる。また、そのシーズンに初めて採ったアーサは、ハツアーサあるいはミィアーサと呼ぶ。一方、モズクは 3 月中旬～5 月末に採れ、やはり出始めた頃が美味しい。今は、ニーラン石からコンドイ浜の間でよく採れる。

もちろん、UM さんは貝類も採りに行く。2000 年の旧暦 3 月 3 日の浜下りには、コンドイ浜までイソハマグリ（方名：ハムイ、シジミとも）を採りに行ったそうだ。また、かつてはサザエ（方名：ジンガラシャーミナー）やシャコガイ（方名：ギラ）などもよく採れた。シャコガイの殻は、洗面器や洗濯物入れ、イモを洗う容器などに使用した。竹富島の方言で、「ギラ、トリナハラディ」と言えば、「シャコ貝を採りにいきましょう」の意味である。

ほかに、ンゾーと方言で呼ばれるイイダコ捕りがある。このンゾーを捕るための貝は、ンズブナーといい、フデガイの一種と思われる。これを用いたイイダコの捕り方については、小浜島のところ（Ⅳ）に記す。

なお、崎山（1972: 480）によれば、「女は日中または、月夜に毒草の汁を水溜に入れて小魚をとり、貝類、エダコ海草を採取して蛋白源にする」とあるが[9]、毒草を用いた漁の話はまだ聞いたことがない。

ところで、最近、こうした島の女性たちによるマイナーサブシステンスが、漁業権問題に直面している。リーフのところまで石垣島の漁民がやってきて、海藻や貝類を採集している女性たちを排除するというのだ。採集を続けていると、罰金を払うよう脅されたり、水をかけられたりすることもあるらしい。このため、石垣島の漁民が採り終えてから、アーサやスヌルを採る羽目になっている。現在、島民は島周囲のリーフへの入浜権を主張している。

2）タコ漁

TH さん（1917 年生まれ、男性）は、タコ捕り名人として有名で、テレビ番組でも取り上げられたことがある。自宅近くの空き地で野菜などをつくるかたわら、1～3 月にはタコ漁に出かける。無風で干潮のときが、タコ漁にとって好条件であるという。

TH さんのタコ漁は、船の上から海中のタコを発見して、銛で突くというものだ。タコの捕れるポイントまではエンジンをかけて行くが、ポイントに着いてからはエンジンを止め、棹でゆっくりと船を進めながらタコの様子をうかがい、見つけると素早く銛で突くのである。タコがよく捕れるのは、島の南側の東美崎からカイジ浜にかけてであるとのことだ。

タコは刺身や炒め物として普通に食べられるほか、祭事とも結びついており、種子取祭のユークイ（世乞い）のときに、ニンニクと炒めたものが食される。

なお、崎山（1972: 480）によれば、「男は暗夜、茅、すすきのタイマツをとぼして島の周りのヘタで小魚、タコを取る」とある。

5．染織

1）ミンサー織り

調査対象の 3 島は、どの島も染織が盛んである。なかでも竹富島は、竹富町織物組合の事務所が置かれている竹富民芸館があることから、竹富町における染織の中心地とみなしてよいだろう。

竹富島の代表的な織物にミンサー帯がある。これは、綿でできた狭い帯という意味であり、古くは沖縄各地で織られ、地方によって特徴があった。竹富島のミンサー帯は、五つ玉と四つ玉の絣を組み合わせた柄が特徴的で、いつの世までも末永く仲睦まじくとの願いを込めて女性たちが織り上げ、想いを抱く人に贈ったと伝えられている。近年は、細帯だけでなく、テーブルセンターや袋物などさまざまな土産物にその図柄が用いられている。染料も、伝統的な藍染めにとどまらず、クール（紅

露）、フクギ（福木）などの使用もみられ、カラフルになっている。

ミンサーの原料となる木綿は、八重山ではつくられていない。原料を育て、それから繊維を採り、紡いだ糸を機にかけて織るという基本形は、竹富ミンサーにはみられない（八重山ミンサー記録誌及び記録フィルム作成委員会編，1993）。

2）芭蕉布

木綿は栽培されていないが、芭蕉や苧麻ならば、庭や空き地で育てるところから始めて、手作りで織っている人たちが今でも少なくない。ここでは、芭蕉を育てて糸を紡ぐまでの概略を記そう。

芭蕉には、実芭蕉、花芭蕉、糸芭蕉の 3 種類がある。繊維は糸芭蕉から採るが、採れるようになるまでに 3 年ほどを要する。収穫するまでは、1 年に 3〜4 回、梢頭を削り落とす（スラウチ）。これを行なうことで、繊維が柔らかくなる。適当な年月が経過したら、根元から約 20cm で伐り落とす。このとき、皮の枚数が多く、外皮が枯れ熟しているのが良い。芭蕉の幹は何枚もの皮で被われているので、幹の輪層を 1 枚ずつ剥ぎ取る（カーハギ）。そして、オーカー（外皮）、ナカガー（中皮）、ビッチャー（芯）に分け、鍋に灰汁入れてナカガーをむらなく煮る。灰は、ガジュマルかオオハマボウ（方名：ユウナ）が適当であるという。灰汁で煮た芭蕉は、パイと呼ばれるステンレス製の金物でしごいて不純物を取り除く（バシャヒキ）。このときは、右手にパイを持ち、左手の親指にはクロツギ（方名：ンーマニ）を巻いて滑り止めにする。採った繊維はしばらく竿にかけて陰干しにしておき、最後は編んで 1 本の糸をつくる（バシャンミ）。

このようにしてつくられる糸は、用途に応じて細くしたり太くしたりする。そして反物の長さに整径され、絣くくりし、染織をしてから織る。織った布は、海水に石灰を入れて煮たあと、海晒しをして仕上げることになる。

3）養蚕業と絹布

竹富島では明治時代に養蚕が導入され、昭和初期の頃は最も盛んだった。現金収入の少ない農家にとって、養蚕は魅力ある副業であった。春夏秋冬、年に 4 回、絹を採ることができたが、夏期は失敗することが多く敬遠されており、実質的には 3 回採ることが普通だった。当時は、個人が自分の庭や畑に桑を植え、蚕の餌にしていた。餌が不足する場合には、桑を求めて西表島や鳩間島まで渡ることもあったようである（辻，1985: 357）。

養蚕農家の数は、戦後はしばらく減少し続けた。ところが、本土復帰以後、島の主たる産業が農業から観光へと変化していくなかで創造的な産業を再生したいという思いから、1980 年頃、養蚕の復活を目指して協同組合が発足した。当初は 22 名の組合員がおり、栽培契約を交わして、事業が軌道に乗っていくかにみえた。しかし、採算が取れないことを理由に次々に辞めていき、1995 年をもって養蚕農家は 1 軒もなくなった。

竹富島には、絹布をつくる伝統技術も伝えられている。だから、養蚕業の再生は、地場産の絹糸を用いた織物産業も盛んにすることまで射程に入れた運動でもあった。しかし結局、離島における養蚕は国際競争に敗れ、そうした動きは挫折してしまった。

6．観光

1）自立のための土地買い戻し

現在、竹富島には本土資本のリゾート施設が存在しない。しかし 1985 年頃には、島の総面積の約 2 割が本土のリゾート企業などの手に渡っていた。今は、その土地の多くが島の人によって買い戻されているのだが、その経緯の概略を以下に記す[10]。

1972 年の本土復帰が近づくと、ほかの八重山の島々と同様に、竹富島でも本土企業による土地の買収が始まった。当時は、それまでの主要産業であった農業が衰退していたので、土地所有者は不毛の土地に値段がつくなら助かると、1 ドル 360 円の時代に 1 坪 3 セント程度で次々と売却していった。

こうした本土企業の動きに対して、1972 年 5 月、数少ない開発反対派が「竹富島を生かす会」を結成し、本土資本の進入阻止を訴える反対運動を展開し始めた。この会で先頭に立っていたリーダーが、エビ養殖会社社長 UT さんの父親である。当時、UT さんは大阪で運送会社を経営していたが、父親に島を守るよう呼び戻された。

UT さん自身は、本土資本による観光開発に反対ではなかった。U ターンしてからは、クルージン

グなどの新しい観光事業を行なっていた。しかし、青年会長を務め、島の自治活動に関わるうちに考えが変わっていった。過疎化・高齢化が着実に進んでいる状況を目の当たりにして、このままでは伝統的な祭事を続けることができないことを実感し、島が自立する必要性を認識したのだった。すでに 1km² 以上が本土企業に買収されていたので、それを買い戻すには莫大な資金が必要だった。けれども、島の自立にかける願いが通じて、買い戻しに必要な金額を集めることができた。

UT さんは、買収された土地をただ守るためだけに買い戻したのではない。1988 年のリゾート法（総合保養地整備法）成立後、その土地を利用した大型リゾート開発を県に申請した。島の伝統的な建築様式を生かしつつ、ホテル、コンドミニアム、ゴルフ場などを建設するという計画で、開発面積は約 156ha、島の総面積の 3 割弱という大型プロジェクトであった（三木, 1990: 89）。予定では 1995 年 7 月に開業する予定だったが、経済不況のために資金の目途が立たず、現在に至っている。

2）町並み保存運動

竹富島には赤瓦の町並みが保存されており、これが観光客を惹き付ける最大の魅力となっている。ただし、この伝統的な町並みは、島民が意識的に残しているのであって、決してたまたま残っているわけではない。ここでは、この町並み保存運動について、聞き取りと竹富町教育委員会（1988）などからまとめておく。

本土復帰の前から、竹富島の文化資源を高く評価していたのは、日本民藝協会の人たちだった。伝統的な町並み景観と、ミンサー織りに代表される手仕事、さらに祭祀芸能の多彩さに注目し、民俗文化の保存をバックアップしていた。

復帰前後の本土企業による土地買い占めが進行すると、そうした島外の支援者と「竹富島を生かす会」のリーダーらは、開発反対を唱えるだけでなく、竹富島を「生かす」方策を検討し始めた。そうした運動を展開していくなか、本土企業の不誠実な対応が表面化したこともあって、次第に伝統的な町並みを保存していくという合意が島内で形成されていった。

1986 年 2 月、「売らない」「壊さない」「汚さない」「乱さない」「生かす」を 5 本柱とした「竹富島憲章」が総会で承認され、伝統文化と自然環境を継承していくという島民の総意が示された。竹富町も、同年 3 月に竹富町歴史的景観形成地区条例を制定し、支援体制を確立した。また、翌 1987 年 4 月には、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

1986 年の総会では、「竹富島憲章」の制定のほか、町並みの現状変更申請にかんする地元協議会として、公民館組織内に「竹富島集落景観保存調整委員会」を設置することが決まった。この委員会に対しては、その権限等について一部の反発があり、1988 年には公民館から一度は分離されたが、現在では「竹富島まちなみ保存調整委員会」（以下、調整委員会）と改名し、公民館を構成する組織として正式に位置づけられている。

この調整委員会は、竹富町教育委員会の下部組織にも相当するもので、月に 1 回開かれ、主として現状変更申請のあった物件について審査し、必要な場合は設計変更を要請する。審査の基準となるのは、教育委員会が 1992 年度から 2 年間かけて調査・分析し、島民との協議を経て作成された「竹富町景観形成マニュアル」である。このマニュアルの特徴は、集落に存在するすべての建造物や環境要素を実測し、その分析から伝統的景観のもつ空間秩序や形態の特徴を明らかにすることで、竹富島の景観形成にあたっての規範を示したことにある（西山, 2000c）。

調整委員会のメンバーには、比較的若い 30～40 代の人が多い。合意形成を円滑に行なうことを第一義とすれば、こうした若い人々が少ない方がよいはずである。なぜなら、規範的マニュアルをもとにして町並みを保存していく調整委員会のやり方に対して、保守的であると反発しやすいからだ。それでも、この調整委員会に若い人が多いのは、そうした人たちにとっての教育機会と捉えられており、積極的に委員に登用することで、町並み保存に責任を持つようになることが期待されているようだ。

景観形成に関連して、明治時代から行なわれている大掃除（キッスソージ）にも触れておこう。これは、警察（キッス）の掃除を意味し、かつて駐在の号令で始まったことからこう呼ばれている。

写真2　伝統的な赤瓦の町並み

キッスソージでは、1 世帯当たり 300 円を公民館に支払って、屋敷をきちんと掃除しているかどうか検査してもらう。このとき、検査の役目を担うのが、小中学校の校長、郵便局長、公民館役員、衛生部員である。年に 2 回、だいたい 5 月と 10 月の中旬に行なわれる。秋のキッスソージは、種子取祭の日程を考慮して、その前に行なう。検査のときに、人口や家畜の数、車の数などを細かく調べ、公民館が賦課金を課すときの基礎資料としている。

3）水牛車観光

竹富島観光を特徴づけているのは、伝統的な町並みを水牛車でゆっくりとめぐることであろう。ここでは、水牛車観光が島内にどのようにして根付いたのかを記す。

竹富島で水牛車観光を最初に始めたのは新田観光で、1980 年頃のことである。水牛車は集落内のごみを収集するために使用されていたものだった。すでにその 10 年ほど前から新田荘という民宿を始めていたので、ごみ収集日ではないときに、ときどき宿泊客を水牛車でコンドイ浜まで送迎していた。当時は、新田荘に泊まる人にだけ提供される特別サービスだったのである。ところが、その様子がテレビ番組で紹介され、観光客から「水牛車に乗りたい」という問い合わせが来るようになった。そこで、そうした声に押されるかたちで、水牛車を所有している人を集めて、最初は 3 人で営業を開始した。その頃のコースは、集落とコンドイ浜とを結んでいた。これを 2～3 年続けたが、距離が長くて時間がかかるので、集落内を移動するように変更したという。

水牛車はパックツアーで来島する観光客が必ず乗るので、団体客が集まる 11 月～翌年 4 月頃まで、水牛車観光は大いに賑わう。新田観光のほかに、水牛車組合が発展してできた竹富観光という会社があり、これら 2 つの会社で多くの観光客に対応している。なお、新田観光は、1 人を除いて島出身者によって構成されているのに対し、竹富観光は従業員 7 人のうち島出身者は 1 人であり、好対照となっている。

4）有償バス事業

竹富島の観光業を支えているのは、パックツアーで来島する観光客である。この人々がツアーで島を訪れる場合、ほとんどが2～3時間程度で島中をまわることになる。このため、効率よい観光が求められ、有償バス事業の必要性が高くなっている。ゆったりした水牛車観光が可能であるのは、有償バス事業を前提としているからでもあり、両者は不可分な関係にある。

島には「竹富有償運送車両組合」という有償バス事業を行なっている人々による組合がある。現在、組合員は18名で、ほかに3名の事務員を雇っている。島に住んで、島に貢献する人でないと組合員にはなれず、入会するときには公民館長と組合長のサインが必要となっている。

提供しているサービスは、港と集落を結ぶ路線バス、それと島内観光である。路線バス事業は、当番制で1人が担当する。当番以外はみな島内観光を行なう。路線バスの収入は、100％組合員が得ることができるのに対し、島内観光は2％を組合の運営費に納める義務がある。ほかに、組合費を支払う必要がある。

島内観光の場合、1時間半から2時間をかけて、赤瓦の町並み、コンドイ浜、ビジターセンター、民芸館などを回るのが標準コースで、料金は乗合1,000円、貸切6,000円となっている。有償バスを利用する観光客は、9割くらいがクーポン券で処理する。つまり、利用者のほとんどは、旅行代理店の企画によるツアーで来島する人々である。

この有償バスとして、現在ではマイクロバスが運行しているが、昔はトラックの荷台にベンチシートを敷き、そこに観光客を座らせて観光案内を行なっていたそうだ。しかし、1965年頃から、旅客運送業としての基準を満たすように指導され、次第に変化してきた。バスの台数は、1980年頃は7～8台だったが、1990年頃までに5台増え、さらにそれから5台増えて現在の数になっている。

有償バス事業は、町並み保存運動と対立する部分がある。それは、バスが町並みを往来すると、集落景観を構成している白砂の道が凸凹になるからだ。この問題を解消するために、集落の外側に環状道路をつくることになり、すでに一部供用されている。有償バスでの移動には環状道路を利用し、観光客が集落に入るときには、原則としてバスから降りて歩くようにすれば、集落内の道路の崩壊を防止できるというわけだ。

写真3　凸凹になった道路を平らにしている島人

ところが、有償バスの組合長は、「外周道路を作っても、バスが集落を回らないわけにはいかないんじゃないか」と話す。冬場の観光客の 8 割はシルバー層であることを考慮すれば、狭いとはいえ集落内を歩いて見学することは難しいだろうというのだ。また、バスを降りて集落を歩く人が増えると、集落に住む個人のプライバシーがますます侵害されるという問題も生じかねない。

集落内へのバスの進入にかんしては、①全くバスをいれない、②一部を舗装し、そこだけバスを入れる、③バスを入れないゾーンを設定する、という 3 つの方向で検討されている。町並み保存を最上位課題にすれば、①を採用することになろうが、組合の言い分にも妥当性があり、現在、島内で協議して方向性を定めることになっている。

5）民宿組合

有償バスの運行によって生じる道路の崩壊には、狭い島であるにもかかわらずバスで急いで島内を回らないといけないという根本的な問題が現れている。石垣島から 10 分程度という近距離にあるため、ほとんどの観光客が竹富島に宿泊せず、2 時間程度で島内を見て回る人が多い。このような日帰り客に対して、竹富島の観光スポットを一通り案内しようとすると、忙しくならざるをえず、十分な対応ができていない。特に、冬期の繁忙期には、トイレに行く時間さえも確保できなかったり、観光客を時間通りに移動させるために言葉遣いが荒くなるなどの問題が表面化している。

現在、竹富島にある民宿・旅館は 10 軒ある。しかし、本土復帰後の最盛期には 26 軒もの民宿があった。この当時は、「入込み客の 2～3 割が宿泊客であり、彼らは 2 泊～数泊して島の自然や人情とじっくりつきあい、景観や文化を満喫し、リピーターとなって繰りかえし島を訪れた」(西山, 2000a: 34) という。ところが、石垣島からの離島航路が整備されたことにより、宿泊客が激減して、今のような日帰り観光地となった。こうした問題に対して、島に宿泊する観光客を増やそうという民宿組合の動きがあるので、ここに紹介しよう。

竹富島民宿組合が、宿泊客獲得のために修学旅行生を受け入れるようになったのは 5 年くらい前からである。1999 年度は、3 つの高校が竹富島に宿泊した。もちろん、1 つの民宿では収容できないので、生徒は複数の民宿に分かれて泊まることになる。また、一学年の人数が多いときには、全員が一度に来島するのではなく、いくつかのグループに分けて、グループごとに来島するようにしている場合もある。民宿組合は、このとき必要な調整を行なって、受け入れ体制をつくる。団体客は、学校のほかに農協や会社などもあるという。団体客には、特別に野外でバーベキューを行ったり、公民館（まちなみ館）で伝統芸能を披露するなどのサービスを提供することもある。

民宿組合の組合長は、竹富島における新しいかたちのエコツーリズムの展開を目指している。西表島では自然資源を利用したエコツアーが盛んであるが、竹富島では芸能・文化に触れるエコツアーを企画できないかと検討している。たとえば、島内の御嶽をウォークラリー風に歩いて回ってみるようなツアーである。そのようなツアーを魅力あるものにするためには、来島するとすぐにビジターセンターに案内し、ビデオやスライドなどを駆使して、島の芸能・文化を知ることができるような充実した施設が必要となる。現在、島の西部に古いビジターセンターがあるが、観光客にあまり見向きもされないような展示内容となっている。これを改善し、場所も港の近くに移転しようという計画があるので、組合長は新しいビジターセンターの完成に期待を寄せている。

Ⅲ. 西表島

1. 西表島の概要

西表島は、方言ではイリムティと呼ばれ、周囲 130.0km、面積 289.27 km²（ほかに由布島 0.15 km²、内離島 2.10 km²、外離島 1.32 km²）、世帯数 963 戸、人口 2,008 人（2000 年 7 月現在）の島である。面積は県内で沖縄本島に次いで二番目の広さであり、竹富町内で最大の人口を抱える島である。沿岸の平野部に集落が点在し、サトウキビ、水稲、パイナップル、肉用牛などの生産が盛んで大原港の近くには含蜜糖工場がある。また、古くからある集落では祭事が盛んで、祖内・干立集落の節祭は国の重要無形民俗文化財に指定されている。

島には、古見岳、八重岳、テドウ岳、ゴサ岳、

パイシキ岳と400m以上の山がそびえ、降水量も多いため、河川や滝が多数みられる。内陸部はほとんどが原生林に覆われ、山地の低部には熱帯降雨林が発達し、河川には国内最大級のマングローブ林が繁茂している。近年、こうした原生的な自然を観光資源としたエコツーリズムが盛んになっており、特に島の西部を中心に展開されている。

動植物に目を向けると、東部では、仲間川、後良川、前良川の下流域に、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギ、ヒルギダマシ、ヒルギモドキ、マヤプシギが生育するほか、ハクセンシオマネキ、ノコギリガサミ、ミナミトビハゼ、キバウミニナ等が棲息している。河川の近くには、アダン、サガリバナ、ハスノハギリ、ガジュマル、サキシマスオウノキ、ウラジロアカメガシワ、リュウキュウマツ、イヌビワ、ツルアダン、ハブカズラ、コミノクロツグ等が生育している。海岸には、アダン、オオハマボウ、クサトベラ、グンバイヒルガオ等の生育をみる。

西部には浦内川、仲良川、ヒナイ川などがあり、浦内川では仲間川と同様にマングローブ林が発達している。オキナワウラジロガシ、イタジイ、イヌビワ、ガジュマル、オガタマノキ、ツルアダン、ハブカズラ、アヤヘゴ、オニヘゴ、アダン、リュウキュウマツ、ソテツ等が生育している。河川の流域にはシレナシジミ、シオマネキ、ミナミコメツキガニ、オキナワアナジャコ等のカニや貝類が棲息する。また、カンムリワシ、リュウキュウアカショウビンなどの鳥類のほか、爬虫類はキシノウエトカゲ、サキシマハブ、サキシママダラ、ミナミイシガメ、セマルハコガメ、サキシマキノボリトカゲ、イシキトカゲ等、両生類はヤエヤマアオガエル、リュウキュウカジカガエル、哺乳類はイリオモテヤマネコ、リュウキュウイノシシ等と非常に豊富である（大山，1995）。

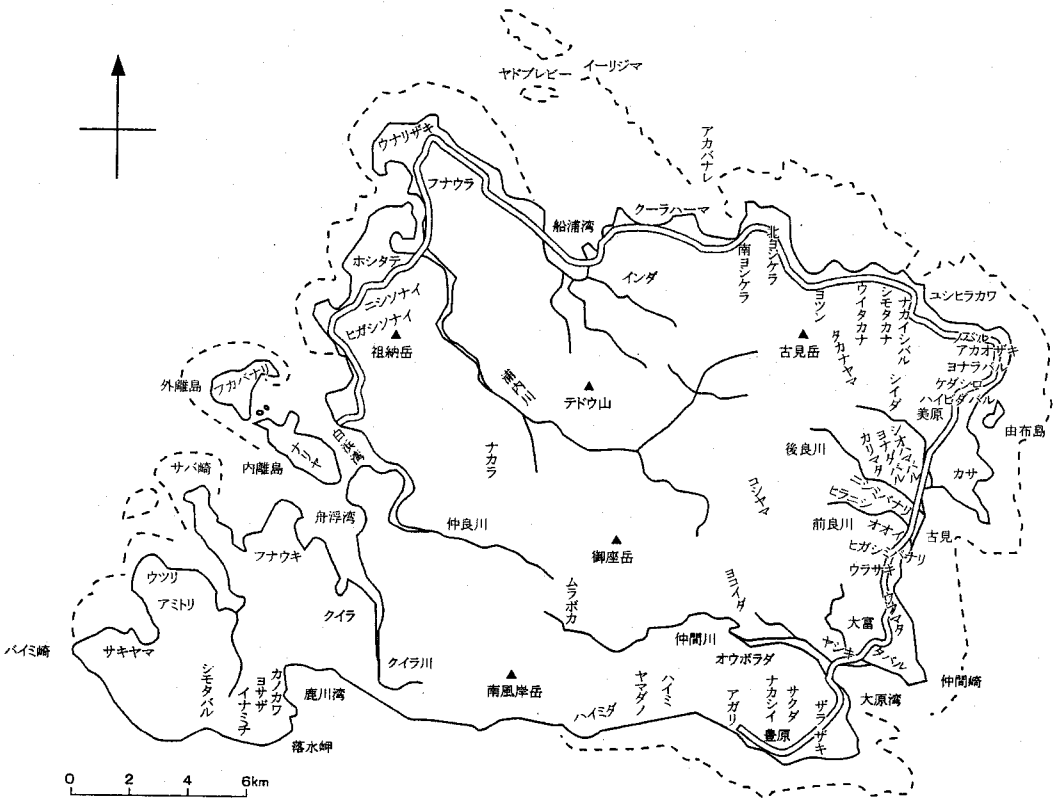

図9　西表島の地名
大山(1995:156)

2．農林業

1）東部地区の歴史——大富開拓史

八重山諸島のなかでも、西表島と石垣島は、戦後、入植の受け入れ地となった。その理由は、沖縄本島や宮古諸島、八重山のほかの離島は人口が多く、農地も狭くて食糧不足で困っていたのに対し、この 2 つの島は、マラリアの猖獗と道路の未整備ゆえに未耕作地が多かったからである。ここでは、東部地区の大富集落を取り上げ、その開拓史の概要を記す。

1952 年 8 月、琉球政府の第一次移民として入植されたのが大富である。そこは、かつて琉球王府時代の強制移住地だった旧仲間村の跡地だった。8 月 13 日に大宜味村から 30 戸、20 日に竹富町から 20 戸（波照間島 10 戸、竹富島 8 戸、黒島 2 戸）、25 日に久米島から 8 戸が入植した。竹富島からは農家の次男・三男を中心 40 名くらいの希望者があったが、口頭試問の結果、8 名が選抜された。OY さん（1914 年生まれ、男性）は、そのうちの一人である。

OY さんが入植を希望したとき、家族は西表島がマラリアの有病地だったので反対したという。しかし、狭い竹富島と比べると、開発の余地がある西表島は魅力的で、家族の反対を押し切って移住したのだった。ここで、当時の八重山の人々の様子を知るために、入植する前までの OY さんの履歴をみておこう。

OY さんは尋常小学校卒業後、台湾へ出稼ぎに行った。男は店番、女は女中として台湾に行くのが竹富島では普通だった。当時の台北は、東京、大阪、京都、名古屋、福岡と並んで、日本の六大都市の一つだった。台湾に渡ってからは、まず徳島県出身の人が経営する洋品店の小僧として働き、次に台湾総督府の病院の下足番として働いた。そして、夜間学校に通いながら中学の勉強をしたことが認められて、病院の受付に採用された。

その後、戦時色がますます濃くなっていき、OY さんに徴兵検査が行なわれた。身長が低いことから丙種となり不採用の結果が出たので、いったん竹富島へ戻ることになった。しばらくして、1938 年、サトウキビ栽培のためにサイパン島へ行くことになった。その頃は、多くの沖縄出身者が、サトウキビ栽培を行なうために南洋へ出ていた。

サイパンに渡った当初は、製糖工場で働きながらサトウキビづくりに励んでいた。しかし、その後、日本軍に飛行場建設のため招集された。戦争末期には完全に戦争に巻き込まれ、結局、米軍の捕虜となって 2 年間抑留され、1946 年に竹富島に戻ってきた。

命からがら逃げまどい、やっとの思いで島に戻ってきた OY さんであったが、狭い土地に多くの人口を抱える竹富島では、慢性的な食糧不足に悩ませられた。だから、開拓さえすれば満足に食糧が得られる可能性を秘めた西表島は、たとえマラリアの有病地であっても、大きな魅力ある土地として OY さんの目に映っていたようだ。

さて、大富への入植当時の話に戻るが、8 月 24 日に鍬入式があって測量に着手した。入植当時の大富は樹木が密生していたので、まずは仲間川をはさんで反対側にある大原に住み、毎日、米軍の燃料用タンクを二つに割った船で川を渡っては、ジャングルを伐り開いていった。工具は、鋸、斧、鍬など、要するに人力に頼る重労働であったが、どうにか平地を確保し、現在、保健所があるところに仮小屋として合宿所を建てた。こうした伐採・開墾・整地は、出身地別に、大宜味班、地元班[11]、久米島班の 3 班に分かれて行なわれた。

開拓を成功させる一つの鍵が、マラリアの撲滅だった。このため、月に 1 回の頻度で開拓者全員の採血、およびマラリア予防薬のキニーネ、アテプリンの面前服薬が課せられた。また、マラリアを媒介するハマダラカを根絶するため、水たまりには石油が撒かれるなど徹底的な対策が講じられた。

開拓がすすむと、入植者へ土地が配分された。各人は、開拓地の周囲から木を伐り、それを用いて家を建てていった。最初は、壁、屋根ともにカヤで葺いた。そのカヤは、仲間川下流の三角州にあるヤッサ島から刈り取ってきたものだった。

家を建てると、いよいよ農作業に取りかかった。まず、当面の食糧を得るために、サツマイモの栽培から始めた。サツマイモの葉はカンダバと呼ばれ、これを使ったカンダバズーシーは美味といわれる。換金作物としては、1953 年の 5 月からバナナと落花生の栽培を始めた（大富開拓史編集委員会編，1992: 42）。しかし、バナナは台風で、落花生はイノシシによる被害で全滅してしまった。陸稲も植えたが、伸びすぎて実は少なかったうえに、

台風に追い打ちをかけられた。仕方なく、伐採した木を薪にして、石垣島で売ることにより収入を得ていた。

そのような逆境にありながらも、共同売店を設立したり、水くみ場と洗濯用水を確保する場として大富川（アマノカーとも）を設置するなどして、生活基盤を整えていった。仲間川は近いものの水の確保は重要課題だったので、各班で井戸掘りも行なったと聞く。

いくつかの失敗はあったが、換金作物としてパイナップル栽培が1954年から始まり、また水田を持って稲作を始める人も現れてきた。それに呼応するように、1954年に精米所が、1957年にはパイン工場が大富に完成した。パイン工場には男女の社員寮があり、女子寮には台湾からの労働者が多かったという。サトウキビも1959年から栽培が開始され、1961年に大原で製糖工場が設立された。この頃は、パイン加工業と製糖業が基幹産業だった。

ところが、パイナップルは農産物の自由化にともなって価格が下落したうえに、台風による影響で青果が腐敗する年があったことなどから、パイン工場は1967年に操業停止に追い込まれた。また、復帰の前年1971年には、4～10月まで降雨がない大干ばつがあり、サトウキビが枯れ、製糖工場も一時閉鎖された。すでに台風によって精米所は潰れ、パイン工場も廃止となった大富では、サトウキビ栽培に頼るほかなかったので、住民が団結して製糖工場を立て直すことができた。その後、サトウキビの画一化を推し進め、現在ではこれと肉牛の飼育が中心となっている。

2）サトウキビ栽培と製糖工場の歴史

西表島では、明治時代の中期にサトウキビが栽培され、製糖されていたことが知られているが、大正期になると、ほとんど栽培されていなかった。再び本格的にサトウキビがつくられるようになったのは1950～55年頃からで、開拓団地である大原、豊原、古見、上原、住吉地区においては、小型機械動力による製糖工場が建設された。その後、西部地区では採算がとれず、1965年に工場休止に追い込まれたのに対して、東部地区では中型工場が誘致されて今に至っている。現在、西表島にある唯一の製糖会社は西表糖業である。ここで、入嵩西（1993）を参照しつつ、西表糖業の歴史を簡単に振り返っておく。

1960年、大富でパイン缶詰を製造していた本土資本（大洋漁業）の琉球産業が、稼働率を高めるために製糖工場の建設許可を申請した。ところが、当時の農協長が地元琉球側の資本でつくった方がよいと主張した結果、琉球産業の許可申請は却下され、代わりに地元資本の西表製糖に認可が下りた。西表製糖は、東部にあった4つの小型工場を買い上げ、本島にある北部製糖から中古機械を移設し、1961年1月から操業を開始した。

その後、製糖事業は順調に伸展していったが、1971年、長期干ばつと大型台風の被害によって、サトウキビの収穫は皆無状態になり、工場は閉鎖を強いられた。こうしたなか、農協主導で操業を再開しつつ命脈を保ち、1973年9月に与那国製糖と合併し、その西表事業所として再発足した。1975年には、与那国製糖工場の売却により、以後、西表糖業と社名を変更して現在にいたっている。なお、工場能力は100tである。

表9は、西表糖業の年期別操業実績である。年期による生産量の変動が大きいが、1971-72年期の落ち込みが非常に目立つ。前年期と比較して、産糖量はおよそ8分の1まで減少している。しかし、1976-77年期には、産糖量が100万tを超え、以後は比較的堅調であるようだ。

3）大富土地改良問題

現在、大富では、土地改良をめぐる環境問題が生じている。地元農家がすすめようとしている土地改良事業に対し、自然保護団体からの抵抗がある。この経緯を、開拓当時までさかのぼって素描しよう。

地元農家に話を聞くと、入植当時、琉球政府から3haの土地配分が約束されていた。ところが実際は1.5ha程度であった。しかも、国有地が無償で譲渡されるものだと思っていたのに、一部有償で払い下げされたので、移民たちは期待を裏切られた。そのほか、ブルドーザーは道路を開くために利用されただけで、個人の開墾にはほとんど使えなかったり、入植後の納税免除も、石垣島では市民税が免除されたのに、西表島ではそのような措置がとられなかった（金城，1988；大富開拓史編集委員会編，1992）。

表９　西表糖業年期別操業実績

年期	面積(a)	反収(kg/10a)	生産量(t)	歩留(%)	産糖量 (t)
1961-62	6,300	6,860	4,322,103	11.70	505,674
1962-63	11,390	5,559	6,331,400	12.01	760,353
1963-64	13,644	3,541	4,831,211	11.76	568,150
1964-65	15,200	8,591	13,058,312	12.50	1,632,800
1965-66	13,726	4,512	6,193,524	12.58	779,080
1966-67	7,153	4,128	2,952,985	12.26	362,037
1967-68	9,198	7,552	6,946,729	12.00	833,607
1968-69	14,247	7,008	9,983,853	13.23	1,320,863
1969-70	13,741	4,998	6,867,371	12.56	862,541
1970-71	11,230	7,442	8,357,649	13.24	1,106,530
1971-72	4,740	2,817	1,335,132	11.18	149,268
1972-73	7,650	3,820	2,922,568	13.27	387,825
1973-74					
1974-75	5,729	4,843	2,774,514	12.79	354,730
1975-76	7,780	5,378	4,184,275	13.74	574,950
1976-77	14,009	6,152	8,617,708	14.64	1,261,672
1977-78	13,366	4,547	6,077,699	14.17	861,232
1978-79	15,005	6,144	9,219,320	14.54	1,340,065
1979-80	14,294	6,116	8,742,709	14.02	1,225,740
1980-81	11,292	6,582	7,432,083	14.70	1,092,450
1981-82	9,559	7,286	6,964,411	14.17	987,020
1982-83	9,588	5,972	5,726,026	13.42	768,600
1983-84	11,321	6,465	7,319,044	14.31	1,053,000
1984-85	14,855	8,019	11,911,759	13.79	1,642,611
1985-86	14,160	6,503	9,208,562	13.85	1,275,102
1986-87	13,679	6,752	9,236,096	14.39	1,329,128
1987-88	16,131	7,516	12,123,605	14.12	1,711,860
1988-89	15,305	6,115	9,359,070	15.15	1,418,009
1989-90	16,055	7,370	11,832,059	14.51	1,717,078
1990-91	15,639	5,309	8,303,284	14.86	1,234,026
1991-92	13,582	7,211	9,794,445	14.05	1,376,120
1992-93	12,916	6,941	8,964,412	14.26	1,278,399
1993-94	11,973	7,862	9,413,738	13.75	1,294,031
1994-95	12,153	5,405	6,568,482	13.74	902,509
1995-96	10,722	7,237	7,759,162	15.08	1,170,082
1996-97	13,956	4,759	6,642,302	14.39	955,827
1997-98	12,902	7,467	9,633,998	15.12	1,456,660
1998-99	14,933	7,331	10,947,726	14.34	1,569,904
1999-00	13,058	6,877	8,980,062	13.98	1,255,413

西表糖業資料より作成

写真４　仲間川河口のヤッサ島におけるサトウキビ栽培

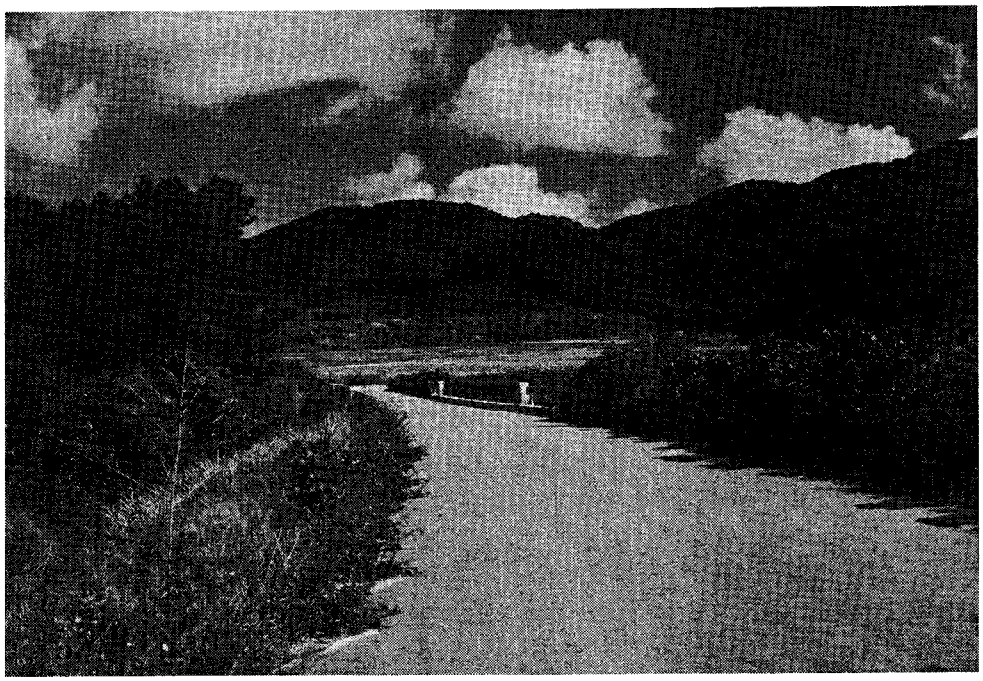

写真５　土地改良後の大富東工区